

**B 日程**  
(2月15日)

2026(令和8)年度  
総合文化学部・地球市民学部  
一般入学試験問題  
**国 語**  
12時～13時

受験についての注意

試験開始の前に、以下の注意をよく読んでおくこと。

1. 試験開始の合図があるまで、この冊子を開かないこと。
2. この冊子の問題本文は **14 ページ**、問題は **3 問** である。試験開始後問題を確認し、落丁・乱丁の箇所があるときは手をあげて交換を求めること。
3. ㊦～㊧の問題は、次のとおり解答すること。
  - ・㊦は**両学部全領域共通の必須問題**である。全受験者が解答すること。
  - ・㊦と㊧は**選択問題**である。㊦または㊧のどちらか一方の問題を選んで解答すること。
  - ・㊦と㊧の**2 問**、または㊦と㊧の**2 問に解答**すること。
4. 解答用紙は、すべて**H B の黒鉛筆**または**H B のシャープペンシル**で記入すること。  
(万年筆・ボールペンなどを使用してはならない。)
5. 解答用紙は、マーク式と記述式の二種類である。試験開始の前にマーク式解答用紙の定められた位置に氏名及び受験番号をマーク及び記入し、記述式解答用紙の定められた位置に氏名及び受験番号を記入すること。
6. 解答は、解答用紙の指定された場所にマークまたは記入すること。余白、裏面には何も書いてはならない。問題冊子の裏表紙の下書き欄は、自由に用いてよい。
7. 試験時間中に無断で退場することはできない。
8. 終了の合図があったら、ただちに筆記用具を置き、解答用紙は表を上にして置くこと。この冊子(試験問題)は持ち帰ってよい。



次の文章は小川公代『ケアの物語 フランケンシュタインからはじめる』の一部である。これを読んで、あとの設問に答えよ。〔40点〕

『フランケンシュタイン』は「ケアの物語」とは似ても似つかないという印象なのかもしれない。たしかに、この物語は人の死や死んでいく人で満ちている。その特徴は否定しようがない。そもそも死体からできた「怪物」が自分の創造主に復讐ふくしゅうを遂げようとする物語であるのだから、むしろケアは欠落している。

それでも、死という表面の下には、生きることへのこだわりや、生きようとする決意がある。初めは  A  だった命が、生き延びようという思いをもち、世界とかかわろうとする。そこには迷いながらも「今、ここ」で困っている人に手を差し出そうとしている人たちがいる。二〇一七年放送のテレビドラマ『フランケンシュタインの恋』にも、同様のテーマが描かれていた。

原作の『フランケンシュタイン』も、そういう生に寄り添うケアの物語だ。

作者のメアリ・シェリーは、女性にとつてとてつもなく生きづらい時代を生き延びた  A  な存在だった。一八一五年二月二日に初めて子どもを出産したが、名前もつけない間に亡くなってしまった。同年三月一九日の日記には、その子どもが生き返った夢を見たとして記している。メアリ・シェリーが赤ん坊を火の前で温めると生き返ったというストーリーは、失意のどん底にいた彼女の祈りが夢という形をとつて具現したのかもしれない。

そういう意味で、クリーチャー、あるいは「怪物」と呼ばれる打ち捨てられた存在は、創造主であるヴィクター・フランケンシュタインをも凌駕りょうがする存在感を放っている——クリーチャーにはしっかりと「声」が与えられている。この作品が世界中に拡散するきっかけとなったジェイムズ・ホエール監督による映画版のクリーチャーには物理的な「声」は与えられていないが、その代わりに圧倒的な存在感が映像の力によって示されている。

「フランケンシュタイン」が怪物の名前であるという誤解が生じているのは（たとえば、藤子不二雄名義の漫画『怪物くん』のクリーチャーは「フランケン」と呼ばれている）、そういう背景も関係しているだろう。「フランケンシュタイン」は怪物ではなく、科学的進歩をその人造人間の創造によって実現しようとする科学者の名前である。

メアリ・シェリーの『フランケンシュタイン』は一八一八年に刊行された。近代の黎明期（れいめいき）に誕生したこの小説は、ある一つの「理念」によって規定される〈大きな物語〉へのアンチテーゼでもある。

近代社会はそういった大きな理念2に到達することをめざすことで支えられてきた。ジャン・F・リオタールによれば、「その「理念」とは、解放のそれだ」。科学による社会の進歩や、労働の解放、教育による平等思想などもあげられるだろう。〈大きな物語〉とは、このような理念に沿った普遍的な人類の歴史をたどることでもあるが、〈大きな物語〉の恩恵にあずかることのできない小さな小さな人たちの物語は、近代において語られることが少ない。けれども、〈大きな物語〉からこぼれ落ちたいくつもの語りがかき消されることなく、むしろその異質な声が豊かに響いてくるとき、それを〈小さな物語3〉と呼ぶことができるのかもしれない。

4 『フランケンシュタイン』には、複数の断片的な語りがあり、それが小さき人々を「ケア」する構造になっている。それを可能にしているのが、メアリ・シェリーが用いた書簡体小説の手法である。書簡体の語りというのは、特定の人物になり代わって語る全知の視点や一人の「個」の視点からのみ語られる一人称の語りとも異なり、登場人物たち自身が語ることができる語りの手法なのである。

ヴィクター・フランケンシュタインも、圧倒的な「科学」の力による解放の物語を語り、彼の伴走者である北極探検家ロバート・ウォルトンも野心の物語を語る。そして、書簡体のおかげで、そこに存在するのにいないことにされてしまう、つまり社会から疎外されている登場人物——クリーチャー、フランケンシュタインをいたわるエリザベス・ラヴェンツァ、クリーチャーが遭遇するサファイアというアラブ人女性——も声を与えられているのだ。

ちなみに原作の『フランケンシュタイン』の副題は「現代のプロメテウス (or The Modern Prometheus)」である。メアリ・シエリーの意図を察するに、神から火を盗んで人類に分け与えたプロメテウスは、比喩的には、科学の力を人類に与えることよって暗闇（無知）から救ったことで英雄になったことが示唆されている。けれども、『フランケンシュタイン』の複数の声をもつ、つまり多声的な物語はまさにその「解放」という〈大きな物語〉に疑義を投げかけている点で、<sup>5</sup>徹底的にアイロニカルだ。

(注) ○ケア——他者の心身や生活に気を配り、助けたり支えたりする行為や姿勢をあらわす。

○物理的な「声」は与えられていない——ジェイムズ・ホエール監督による映画ではクリーチャーには台詞せりふがなかった。

○アイロニカル——皮肉を含んでいる。

## 問1

**A** にあてはまる最も適切なものを、次の①～⑤の中から一つ選んで、その番号をマークせよ。

- ① 繊細
- ② 脆弱ぜいじやく
- ③ 強靱きやうじん
- ④ 華奢きやしゃ
- ⑤ 稀有けう

## 問2

傍線部1「誤解が生じている」のはなぜか。理由として最も適切なものを次の①～⑤の中から一つ選んで、その番号をマークせよ。

- ① 作品内で、丁寧に説明されていないから。
- ② 映画版のクリーチャーに台詞せりふがなかったから。
- ③ 映画版のクリーチャーが映画を見た人に強い印象を与えたから。
- ④ 映画版のクリーチャーが「フランケンシュタイン」という名前だったから。
- ⑤ ヨーロッパでは「フランケンシュタイン」という名前の怪物を描いた文学作品が古くから存在していたから。

問3 傍線部2「理念」にあてはまらないものを、次の①～⑤の中から一つ選んで、その番号をマークせよ。

- ① 科学の力による解放
- ② ケアの思想
- ③ 教育による平等
- ④ 労働の解放
- ⑤ 社会の進歩

問4 傍線部3「小さな物語」について、次の文の空欄1 2 にあてはまるものを、次の①～⑤から一つずつ選んでその番号をマークせよ。

〈小さな物語〉は 1 の 2 によって形づくられている。

- ① 全知の視点
- ② 小さな人たち
- ③ 圧倒的な声
- ④ 普遍的な人類
- ⑤ 異質な声

問5 傍線部4について、以下の問いに答えよ。

(1) 「複数の断片的な語り」と同じ内容のことばを本文中から六字で抜き出せ。

(2) なぜ「複数の断片的な語り」が「小さき人々を「ケア」する」ことになるのか、説明せよ。

問6 傍線部5について、どのような点が「アイロニカル」なのか。最も適切なものを、次の①～⑤の中から一つ選んで、その番号をマークせよ。

- ① プロメテウスは英雄であって、「怪物」ではないという点。
- ② プロメテウスは神から火を盗んだが、「怪物」は盗みをしていないという点。
- ③ プロメテウスは神話の登場人物で、「怪物」は文学作品の登場人物であるという点。
- ④ プロメテウスと「怪物」とは行動が一致していないという点。
- ⑤ プロメテウスと「怪物」とが「解放」という概念で重ね合わせられている点。

問7

右の文章の内容と合致するものを、次の①～⑤の中から一つ選んで、その番号をマークせよ。

- ① 『フランケンシュタイン』から「ケア」を読み取ることができない。
- ② 『フランケンシュタイン』の中に〈小さな物語〉を見つけ出すことができる。
- ③ ジャン＝F・リオタールは『フランケンシュタイン』に「解放」を読み取った。
- ④ 『フランケンシュタイン』のクリーチャーは女性を迫害する存在の象徴である。
- ⑤ メアリ・シェリーの『フランケンシュタイン』は科学の進歩を示すために作られた。

二

《次の二と三の問題は選択問題である、二・三のどちらか一方を選んで解答せよ。なお、記述用解答用紙には選択した問題に○を付け、かつマークシートにはマークせよ。》

次の文章を読んで、あとの設問に答えよ。(30点)

日曜日だった。小学校の入学式を間近に控えていた。空は灰色の雲に覆われ、とても寒かった……そんなふうになさな事柄を、水が渦を巻きはじめるときのようにゆっくり手繰ってゆくしかない。父は私たちを公園に連れて行ってくれた。私たち、というのは私と双子の弟のヒロオのことだ。生まれつき体の弱かったヒロオは、いつも家の中心にいるという意味では太陽のような存在だったけれど、それは  X  で、家のなかには長い影が落ちていた……というよりヒロオそのものが慎ましい影のようなものだったのだ。その影がじつはやさしい木陰だと気づいたのは、ずっとあとになってからのことだ。

長身の父は大きな歩幅で歩いた。私はその父に遅れまいと、小走りについていった。そんなことははじめてだったのだ、父親と公園に行くなんてことは。父は印刷会社の勤め人で、けれど私にとってはもつと眩しくて奥深い何か……たとえば静かに漂う香ばしい煙草の煙であり、眼鏡をはずした途端に鋭さを露わにする、あの父特有の濡れたような目であり、門をくぐって踏み石を踏む、ただそれだけで家中に静けさと秩序をもたらし重みのある靴音だった。あの頃、父の顔を真正面から見た覚えがない。

ヒロオは私のように父のうしろを歩こうとはせず、道の反対側を遅れがちについてきた。何度か父は立ち止まり、「こっちに来なさい」と声をかけたけれど、弟は立ち竦み、じっとこちらを見つめて気まずい時間が過ぎてゆくのをた

だ待っている。何度繰り返しても、同じだった。無言で再び歩き出す父の後ろに付き従いながら、私はときどき振り返ってみずにはいられなかった。双子といってもヒロオは体格も体力も私に数段後れをとっている。骨が丈夫でないから知力もつかないのだ、というのが母の口癖だったけれど、頭が鈍かったとは思えない。A 私が見逃していることをよく見ていた。私はヒロオに対して、自分より弱い者に対する態度をとるよう周囲から求められ、そのようにしてきたが、<sup>1</sup>そうすることで自分を守っているという<sup>おぼろげ</sup>臆気な自覚があった。ヒロオは私自身よりずっとそういう私をわかつていて、私もまたヒロオがわかっているということ、どこかでわかっていた。

そのヒロオが父の言うことをきかない……！ 私は理解に苦しみ、不安になった。自分は父と公園に向かっている、なにひとつ変わっていない、大丈夫だ、と胸のうちで確認しながらふと見れば、当のヒロオはうつむき加減で、道に落ちていゝる何かに気を取られたりしながら、いつも膝<sup>ひざ</sup>を摺<sup>す</sup>り合わせているような曲がった細い足をへなへなど動かし<sup>2</sup>ている。私と目が合うと、間のすいた前歯を見せてにこっとした。私は怒った顔をして目を逸<sup>そ</sup>らした。

私たちが赤ん坊だった頃はまだ、そのあたりの住宅地は暮れ時になると、群をなした野犬が駆け抜けていたらしい。夜など遠吠<sup>とほほ</sup>えが物凄<sup>ものすこ</sup>かった気がするの、後から大人に話をきいて付け足した記憶だろうか。犬たちの巢窟<sup>ねくつ</sup>は町外れの丘陵地で、私が三歳になる年に造成が始まり、狼<sup>おおかみ</sup>のような声も姿もふつつり消えた。造成地にはその後、ニュータウンと呼ばれる団地が年々棟を増やしていった。父が連れていってくれたのは、そのニュータウン内にできたばかりの公園だった。

真新しい遊具はどれも大きく、挑みかかっ<sup>て</sup>きそう<sup>で</sup>こわかったのを憶<sup>おぼ</sup>えている。つやのいい青色のペンキで塗られた金属製の滑り台が、まだ平らに均<sup>なら</sup>ただけの敷地の中央で、薄曇りの空の光を吸い寄せたように鈍く輝いていた。私は奥歯を嚙<sup>か</sup>みしめて滑り台に近づくと、父の前で怖<sup>おそ</sup>じ気<sup>け</sup>づいてなるものか、と梯子<sup>はしご</sup>段を一段一段上った。

てっぺんまで来ると、公園中が見渡せた。金属の手摺<sup>つか</sup>りを掴み、おそろおそろ背を伸ばし、すると冷たい空気に肺

は膨らんで、そのまま体ぜんたいがひとまわり大きくなるかと思われた。砂場で遊んでいる小さな子たちがいた。うんていにぶらさがっている、少し年上の子もいた。その公園でいちばんの高みにいるのは私で、ベンチでは父が静かに、眼鏡の奥の目を細めて煙草を吸っている。早く大人になりたい、と私は心のなかで唱えた。それはなかば習慣化した呪文のようなものだった。大人になったら、戦争で奪われた親たちの富や時間や幸福を黄泉よみの国から取り戻すのだ。戦争さえなかったら、祖父は財産を失わずにすみ、私がよく似ているという母の兄は命を失わずにすみ、父は学業を続けて望んでいた未来を失わずにすんだ……あの頃はそんな話を子守歌がわりにきいて大きくなった子供がたくさんいて、私もそのひとりだった。父の兄弟たちは私をためつすがめつとしては言う。俺たちは悪い時代に生まれたが、おまえは宇宙にだって行けるんだぞ……

**B** ヒロオの前では口をつぐんだ。皆の表情から力みが消え、言葉以前の仄暗ほのい場所を胸のうちでさまよっていた。

風に頬をはたかれ、思い出した。上ったからには下りなくてはならないことを。えい、と滑ぼろって呆然ぼうぜんとなる。速すぎて、まるで時間が盗み取られたみたいだ。どこか納得がいかず、もう一度やってみずにはいられない。でも私ははやる気持ちを抑えてヒロオの手をとり、<sup>3</sup>自分がいま征服したばかりの場所に導いた。いつもそうしているように。そしてヒロオもいつものように、私から与えられるものを信じきって受け取った。

すぐに二人とも夢中になった。流れるような感覚に身を任せ、着地すればまた梯子段に走り寄る。私が両腕を上げて滑ると、ヒロオも両腕を上げて滑った。私がインディアンの雄叫おたけびをあげると、ヒロオも雄叫びをあげた。ヒロオが金属の手摺りのおいを嗅かぐと私も嗅ぎ、そのときヒロオはいつもの子供用シロップのおいでなく、果実のような汗のおいがした。上っては滑る、滑っては上る、その繰り返しをどんどん早めてゆけば、トラがバターになってしまった話のように時間は溶けて、永遠に体いっぱい風を受けていられるかもしれない。

でも私が勢いづくのとは反対に疲れてきたのだろう、ヒロオは滑り台のてっぺんに座りこみ、からだの位置を定めるのに手間取っていた。私はその背中に向かって足を踏みならし、クラクションの口真似まねをして急せかした。

待ってよトシ、もうすぐ、もうすぐだからね、さあもういいよ、オーケーだよ……

ヒロオの体は不安定に傾かいで、左手は宙を泳いでいた。焦るあまり「もういい」などと言ったのだ。いつもなら簡単に、そう見きわめられるはずだった。だが気づいたとき、私の手は弟の背を押していた。

泣き声があたりを切り裂き、私はまだ身動きできずにいた。父がヒロオを抱き上げ、額にできた擦り傷を確認して息をつく。「さあ立つんだ、自分で立ってごらん」

ヒロオは泣きながら、ふらつく足で立った。私は夢から覚めたように梯子段を下り、駆け寄った。ヒロオが泣いているのだ。そしてヒロオが泣いているときどうすればいいか、私は誰よりも知っているつもりだった。

「押したのか」

行く手に父が立ちはだかった。私はただ父の顔に目をこらしていたのだと思う。突然、頬が焼けるように熱くなった。何が起きたのかわかったのは、砂場のそばにいたよその母親たちが、じっとこちらを見ていることに気づいたときだ。だんだん痛みがやってくるなかで、これからどうすべきなのか誰かに教えてほしかったけれど、母親たちは目を逸らしてしまう。父は既に弟の手を取って、公園の出口に向かっていている。頭のなかで何かがぐるりと一回転して、私は滑り台の梯子段を上った。滑り降りるとまた梯子段を上り、滑り降りた。脇目もふらずにそれを繰り返したところで、時間を巻き戻すことはできなかった。父の後ろ姿は曲がり角の向こうに消え、母親たちは散り散りになっていった。

(湯本香樹実「緑の洞窟」より)

問1

X

に入る表現として最も適切なものを、次の①～⑤の中から一つ選んで、その番号をマークせよ。

- ① 天高く光る真昼の太陽
- ② まぶしく光る春の太陽
- ③ 弱々しい光を放つ冬の太陽
- ④ さわやかな光に満ちた朝の太陽
- ⑤ 容赦なく照り付ける真夏の太陽

問2

A

B

に入れるのに最も適切なものを、次の①～⑤の中から一つずつ選んで、その番号をマーク

せよ。

- ① だから
- ② けれど
- ③ むしろ
- ④ つまり
- ⑤ まして

問3

傍線部1「そうすることで自分を守っている」とあるが、なぜ「そうすること」が「自分を守っている」ことになるのか。その理由を説明せよ。

問4 傍線部2「私は怒った顔をして目を逸らした」とあるが、どうしてそうしたのか。その理由として最も適切な

ものを、次の①～⑤の中から一つ選んで、その番号をマークせよ。

- ① 兄に甘えて笑顔を向けてくるヒロオに対し、兄の威厳を示そうとしたから。
- ② 父の言うことをきちんと聞いていた「私」を、ヒロオがあざけり笑ったから。
- ③ 深刻な場面にもかかわらず、ヒロオがおもしろい顔をして笑わせようとしてきたから。
- ④ 公園に連れて行ってくれるという父に対して、ヒロオが馬鹿にしたような態度をとったから。
- ⑤ 「私」がヒロオの行動を理解できず不安になっているのに、ヒロオはのんきに笑っていたから。

問5 傍線部3「自分がいま征服したばかりの場所」について、以下の問に答えよ。

- (1) 傍線部3を具体的に指す言葉を十字以内で抜き出して答えよ。
- (2) 「征服」ということばを使ったのはなぜか。その理由を説明せよ。

問6 右の文章の内容と合致するものを、次の①～⑤の中から一つ選んで、その番号をマークせよ。

- ① 双子の弟のヒロオと「私」は、父のうしろについて並んで歩きながら公園に向かっていた。
- ② 「私」は周囲の期待を重荷に感じていたので、早く大人になりたいと思っていた。
- ③ ヒロオは周囲に気を使われて今の状態に満足しているので、大人になりたくなかった。
- ④ 「私」は滑り台を滑ることに夢中になりすぎて、疲労しているヒロオを気遣うことができなかった。
- ⑤ ヒロオにけがを負わせた「私」は、父に叩かれただけでなく、よその母親たちからも非難された。

三

次の文章を読んで、あとの設問に答えよ。(30点)

大納言の姫君、二人ものしたまひし、まことに物語に書きつけたるありさまに劣るまじく、何事につけても生おひ出でたまひしに、故大納言も母上も、うちつづきかくれたまひにしかば、いと心細ふるさとき古里に、ながめ過あごしたまひしかど、はかばかしく御乳母めのとだつ人もなし。ただ、常にさぶらふ侍従、弁などいふ若わき人々のみさぶらへば、年に添そへて人目まれにのみなり行く古里に、いと心細アくておはせしに、右大将の御子の少将、知るよしありて、いとせちに聞きこえわたりたまひしかど、かやうの筋は、かけても思おぼし寄らぬことにて、御返事かへりごとなど思しかげざりしに、少納言の君とて、いといたう色めきたる若わき人、何のたよりもなく、二ふた所御ところのごもりたるところへ、導みちききこえてけり。

もとより御志ごころありけることにて、姫君をかき抱イきて、御帳みちやうのうちへ入りたまひにけり。思おしあきたるさま、例のことなれば書かかず。

おしはかりたまひにしも過あぎて、あはれに思おもさるれば、うち忍しのびつつ通かひたまふを、父殿聞ききたまひて、「人のほど、くちをしかるべきにはあらねど、何かは、いと心細ウきところ」など、許ゆるしなくのたまへば、思おもふほどにもおはせず。君も、しばしこそ忍しのび過あごしたまひしか、さすがに、さのみはいかがおはせむ。さるべきに思おもし慰なぐさめて、やうやううちなびきたまへるさま、いとどらうたく、あはれなり。昼ヒなど、おのづから寝過あごしたまふ折、見たてまつりたまふに、いとあてに、らうたく、うち見るより心苦こしきさましたまへり。

何事もいと心憂うれく、人目まれなる御住まひに、人の御心もいとたのみがたく、いつまでとのみながめられたまふに、四、五日いぶせて積つもりぬるを、「思おもひしことかな」と心細こきに、御袖ごそでただならぬを、われながら、いつ習ならひけるぞと思おもひ知られたまふ。

7 人ごころ秋のしるしのかなしきにかれ行くほどのけしきなりけり

〔『堤中納言物語』「思はぬ方に泊りする少将」〕

(注) ○姫君をかき抱きて——この「姫君」は、姉のほうを指す。

○例のことなれば書かず——「物語にはよくある場面なので書かない」という書き手(作者)のことわりのことは。

○君——姉の姫君のこと。

問 1 傍線部 1 「に」と同じ助動詞は、本文中の波線部ア～オのどれか。次の①～⑤の中から一つ選んで、その番号をマークせよ。

- ① ア ② イ ③ ウ ④ エ ⑤ オ

問 2 傍線部 2 「若き人々のみさぶらへば」を現代語訳せよ。

問 3 傍線部 3 「きこえ」、5 「たまへ」の敬意の対象を、次の①～⑥の中から一つずつ選んで、その番号をマークせよ。

同じ番号を何度使ってもよい。

- ① 姫君二人 ② 姉の姫君 ③ 妹の姫君 ④ 少納言の君 ⑤ 少将 ⑥ 父殿(右大将)

問 4 傍線部 4 「さるべきに思し慰めて」とはどういうことか。最も適切なものを、次の①～⑤の中から一つ選んで、その番号をマークせよ。

- ① 立派な相手なのだからと自分に言い聞かせて、姫君が心の傷に目をつぶろうとしたということ。  
② 少将と結ばれる運命だったのだと受け入れて、姫君が自分の気持ちを落ち着かせたということ。  
③ 少将は姫君にはふさわしくない相手だと思いつつながら、女房たちが姫君の心を労わったということ。

- ④ 親に許されなかったことはうまく隠し通して、少将が姫君の気持ちに寄り添おうとしたということ。
- ⑤ 私たちには前世からの宿縁があったのだと語りかけて、少将が姫君の不安を和らげようとしたということ。

問5 傍線部6「御袖ただならぬ」とは、どのような状態を表しているか、簡潔に説明せよ。

問6 傍線部7の和歌には、「秋」に「飽き」を掛ける修辞（掛詞）が用いられている。同じく掛詞となっている語を、

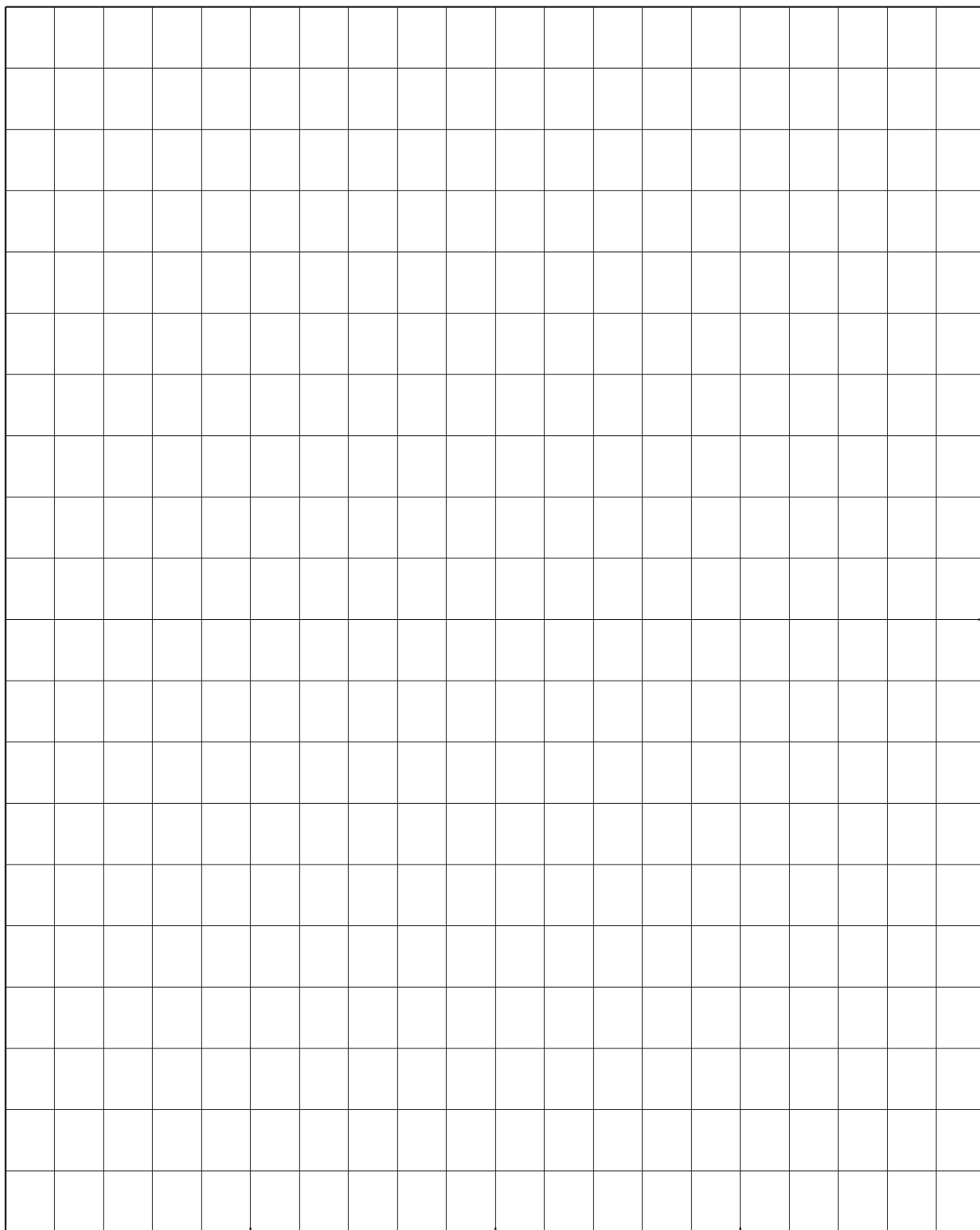
次の①～⑤の中から一つ選んで、その番号をマークせよ。

- ① 人ごころ      ② しるし      ③ かなしき      ④ かれ行く      ⑤ けしき

問7 本文の内容に合致するものを、次の①～⑤の中から一つ選んで、その番号をマークせよ。

- ① 大納言が死んだあと、二人の姫君は、乳母をはじめとする数人の女房たちとひっそり暮らしていた。
- ② 以前から少将に恋心を抱いていた少納言の君は、少将の気を引きたくて姫君の寝所を教えてしまった。
- ③ 姉の姫君と契りを結んだ少将は、想像していた以上の姫君の様子を見て、しみじみと愛おしいいとと思った。
- ④ 少将の父である右大将は、少将が故大納言家へ通っていることを聞き、身分が低すぎる相手だと反対した。
- ⑤ 姉の姫君のところに四、五日通うことのできなかつた少将は、この状態がいつまでつづくのかと落ち着かなかつた。

(下書き欄)



10

15

10

5